えんちょう通信

No.８７
令和　４年１２月　９日
福島市立清水幼稚園
発行者　佐藤　一男

子どもが言葉を身につけるとき

１２月７日(水)、年長組の子どもたちが、クリスマスに飾るランプシェードを作っているというので、見に行ってみました。

もうほとんどの子は出来上がって、残っていたのは昨日具合が悪くて休んだ男の子と、他に何人かだけでした。

その昨日休んだ子に、「昨日お休みだったね。」と声をかけると、「医者へ行ったんだよ。」「寒かったから『微熱』がでたんだ。だから毎日薬を飲んだ方がいいって、先生にいわれた。」と教えてくれました。

すると、それを、そばで片付けをしていた男の子が聞いていて、「『びねつ』ってなに？」と私にきくので、「少し熱があるっていうことかな……。」と言うと、「ふーん。」と言って、また片付けにもどっていきました。

子どもたちは、聞いたことのない言葉にとても敏感です。すぐに使ってみたり、その意味を何とかして理解しようとしたりします。福音館書店で『こどものとも』という月刊の絵本を創刊し、日本のブックスタートも推進した松居直は、次のように書いています。

「子どもは好奇心の塊ですから、まずは言葉だけ覚えます。そしておそらくそれまでに何度か使ってみたと思うんです。だいたい外れです。・・・生活のなかには、そのような不思議な言葉がいっぱいあります。子どもたちは、それを興味津々で聞いて、使ってみて、成功したり失敗したりする。それを繰り返すなかで、見事な言葉の使い手に成長していくのです。」（松居 直『絵本は心のへその緒』2018 NPO ブックスタート）

少し前のことになりますが、やはり年長組の子どもたちが、小さな物語を創る活動をしていたときのことを、担任の先生がとても嬉しそうに教えてくれました。

女の子が３人で、どんな登場人物にしようか話し合っています。

ひとりの女の子が「『シャチ』がいいんじゃない？」と言います。すると別な子が「それ、いいね。『シャチ』にしよう。」「わたしも、『シャチ』がいいと思う。」と、とても楽しそうです。そこで登場人物は「シャチ」に決まるのかなと思ってみていると、その中の一人が「う～ん、『シャチ』って何？わたし『シャチ』、わからない！」。するとさっきの子も「わたしも……『シャチ』、わからなかった。」と言ったというのです。どうも「シャチ」を知っていたのは、言い出した子一人だけだったようです。ほかの子は、「シャチ」が何だかを知らないまま、みんなで盛り上がっていたようなのです。

でも、子どもたちは、そうやって言葉を「自分の力」で身につけていくのだろうと思います。まず言葉を覚えて、いろいろな場面でその言葉を使ってみたり、様々なことを経験したりする中で、「ああ、これが『シャチ』なのか……。」と、その意味を自分で発見して、自分の言葉として使えるようになっていくのかもしれません。

日々、明るく、素直に学んで、成長していく子どもたちを見ていると、本当に嬉しくなります。